ことがある．今回，その治療で著明な肝萎縮を認めた 2 例を経験したので報告する．【症例 1】 50 歳代女性　13 年前乳癌手術後 EC＋TAM10 年．2 年前に肝転移を認め nab-PTX で PR，その後パクリタキセル・ベバシズマブを開始，7ヶ月で PD，エベロリムスとエグセメスタンに変更する．2ヶ月後肝内胆管の拡張を認め胆管ステントを留置した．【症例 2】 50 歳代女性．14 年前乳癌手術後 EC＋TAM　6 年前に縦隔内リンパ節腫大　胸膜播種を認めカペシタビンにて奏効．3 年前に肝転移を認め nab-PTX にて PR その後パクリタキセル・ベバシズマブで PR となるも有害事象でエベロリムスとエグセメスタンに変更する．3ヶ月後胸水貯留で入院した．2 症例とも CT で肝萎縮と肝転移巣も認め，症例 1 では門脈左枝，胆管の狭窄を伴っていた．この 2 例の肝萎縮の原因として肝転移の進行による肝血流の低下の可能性も十分に考慮できる．しかし，ほぼ同じレジメンから肝萎縮に至る状況からパクリタキセル・ベバシズマブ治療後エベロリムス・エグゼメスタンは十分に注意を要する投与であると考えられた．

10．群馬大学における一次二期乳房再建

牧口　貴哉[1]，堀口　　淳[2]，中村　英玄[1]
辻本　賢樹[1]，高他　大輔[2]，長岡　りん[2]
藤井　孝明[2]，佐藤亜矢子[2]，時庭　英彰[2]
矢島　玲奈[2]，樋口　　徹[2]，尾林紗弥香[2]
黒住　　献[2]，横尾　　聡[3]，桑野　博行[4]
（1　群馬大医・附属病院・形成外科）
（2　同　乳腺・内分泌外科）
（3　同　歯科口腔・顎顔面外科）
（4　群馬大院・医・病態総合外科学）

当院では乳癌切除と同時に TE を挿入し，後日 SBI か自家組織による再建を行う一次二期再建が増加傾向である．SBI 再建では，手術回数を減らすメリットがある．自家組織再建では，胸部皮膚を拡張させておくことで，皮弁の皮島を表に出す必要がなくパッチワーク状瘢痕を回避できる．また，SBI もしくは自家組織に入れ替えるまでの数か月間に，両者の選択を再考できることも長所である．しかし，二次再建と異なり，手術手技や術前面談において，癌切除と再建が混合する難しい一面もある．そのため，乳腺外科医，形成外科医，看護師が相互領域の基本技術と知識，患者情報を共有する必要がある．今回われわれは，保険認可後の群馬大学における一次二期再建の戦略・方針について報告する．

11．ベバシズマブ＋パクリタキセル療法が著効した男性乳癌の一例

塚越　律子，片山　和久
（伊勢崎市民病院　外科）

症例は 60 代，男性．2010 年 8 月，1 年前から自覚していた左乳頭部のしこりを主訴に当院初診．全身検索の結果，左乳癌 (浸潤性乳管癌，ER＋，PgR＋，HER2－) 多発肺転移の診断となった．局所コントロール目的に右 Bt＋Ax 施行．T4bN2 (13/13) M1 Stage Ⅳであった．術後補助化学療法は EC4 コース，DTX4 コース行った．2011 年 4 月より TAM 内服開始したが，6 カ月で肺病変の増大を認めた．2011 年 10 月より Cape 内服開始．2013 年 1 月，画像上 SD であったが腫瘍マーカー上昇を認めたため XC 療法に変更した．2014 年 1 月，腫瘍マーカー上昇を認めたため Eribulin に変更した．2015 年 4 月，肺転移の増大を認めたため Everolimus＋EXE に変更した．2015 年 4 月，咳嗽出現．CT にて肺転移の増大を認めたため TAM に変更．2015 年 6 月，腫瘍マーカー上昇を認めたため Bev＋PTX に変更した．その後画像上は SD ではあるが，咳嗽は消失し自覚症状の改善が見られた．現在も Bev＋PTX 継続中である．

ベバシズマブはパクリタキセルとの併用で，進行再発乳癌に対し E2100 フェーズ 3 臨床試験において無増悪生存期間 (PFS) を 5.5 カ月延長したが，全生存期間 (OS) の有意な延長は認められなかった．本症例では Bev＋PTX を投与したことにより症状が著明に改善し，QOL の改善がみられた．このようなレイトラインで使用しても Bev＋PTX 効果を発揮できる可能性が示唆された．

〈セッション 4〉

【治療：精神】

座長：上田　重人
（埼玉医科大学国際医療センター　乳腺腫瘍科）

12．臨床心理士による乳がん患者への心理ケア ～群馬県立がんセンターにおける実施状況～

大庭　　章[1]，板垣　佳苗[1]，植松　静香[1]
藤澤　知巳[2]，宮本　健志[2]，森下亜希子[2]
柳田　康弘[2]
（1　群馬県立がんセンター
がん相談支援センター・精神腫瘍科）
（2　同　乳腺科）

【目　的】 国のがん対策推進基本計画ではこころのケアの充実が謳われており，臨床心理士はその一翼を担っている．本研究の目的は，群馬県立がんセンターにおける臨床心理士による乳がん患者への心理ケアの実施状況を明らかにすることである．【方　法】 平成 26 年度の臨床心理士による心理ケアのデータを後方視的に解析する．【結　果】 新規依頼 241 名 (平均 63 歳) のうち乳腺科は 35 名 (平均 53 歳) だった．病期は Stage Ⅰ～Ⅳがそれぞれ 4 名，9 名，5 名，7 名，再発が 10 名．精神科診断は，なしが 21 名，適応障害が 13 名，その他が 1 名だった．【考　察】 臨床心理士による乳がん患者への心理ケアは，幅広い病期のやや若い患者に，精神症状があまり強くない段階から実施されてい